

Speech of Dr. Yamanaka at the BIE General Assembly in June at Paris

Dear President Mr. Steen Christensen,
Dear Secretary General Mr. Vicente Gonzalez Loscertales,
Dear Distinguished Delegates,
Dear Excellencies, friends, ladies and gentlemen,

Hello,

I am Shinya Yamanaka.

I was born and raised in Osaka and the greater region Kansai, where I still live and work.

Let me tell you a thing or two about us, people in Ōsaka-Kansai.

We are easy-going and down-to-earth. We always wish to be creative, unique, and funny.

In Ōsaka-Kansai, you see such a great concentration of stand-up comedians, as well as scientists, including ten Nobel laureates.

**

"*I-no-chi*."

That's how we call "life" in Japan.

I-no-chi matters,

life matters,

because once lost, it can never be brought back into being.

What about cells, micro-components of *i-no-chi*?

Our body consists of hundreds of different types of cells, skin cells, heart cells, brain cells and so forth.

The fate of those cells CAN be changed and even rejuvenated.

That was the wonder we discovered in the mid-2000s.

One day, cells we took from skin started to beat, dup-dup, lub-dub,

because they had turned into heart cells.

With this discovery, I fell speechless.

Faced with *i-no-chi*'s wonder, one can only be humbled.

I was also shaken to realise that this discovery would lead us to cure Alzheimer's, cancers, heart diseases, and so on.

**

A long time ago, it dawned on me:

Science should give me a key that someday could open a door to the world of wonder,

the ever mysterious wonder of *i-no-chi*.

I ask myself when exactly that was.

I have now a strong sense that it was on a hot summer day.

I was at the site of Ōsaka World Expo 1970.

I was surrounded by an abundance of scientific achievements.

It was so irresistibly enticing to an eight-year-old boy that it left a lasting impression on me.

I am standing here, ladies and gentlemen, to make a pledge that with the key I was given, with the discovery, grounded in Ōsaka-Kansai's deep-rooted history of medical science, I will work ever harder to cure the incurables.

I am here, ladies and gentlemen, to also make a pledge that for Expo 2025 Ōsaka-Kansai, I will do whatever it takes to make the Expo a great laboratory: a laboratory highlighting the beauty of *i-no-chi*, which will enthrall and amaze future scientists from all corners of the world.

Just as it happened to me 48 years ago.

Thank you so much.

博覧会国際事務局(BIE)第163回総会における山中伸弥教授のスピーチ
(平成30年6月13日、於・仏・パリ、OECDカンファレンスセンター/仮訳)

議長、事務局長、各国代表、ご来賓、
ご列席の皆さま、こんにちは、山中伸弥
と申します。

大阪で、もう少し広く申します場合の
関西で、わたくしは生まれ、そして育ち
ました。いまも暮らして、働いております。

そこで大阪・関西のことを、ひとつふ
たつ、申し上げます。

わたくしども、概して気取りがございま
せん。地に、足をつけております。

だいたいいつも、クリエイティブであり
たい、独創的でありたい、と。おもしろい
人間でいたいものだとそう思っている
ところがありまして、ですから大阪・関西
には、なんといっても漫才師がここに集
中しております。それでいて、科学者も
大勢いる中には、ノーベル賞受賞者も
10人いる、と、そういう次第でありま
す。

「イ・ノ・チ」。

わたくしども日本で「ライフ」のことを、
そう呼びます。

ライフ

イ・ノ・チは、つまり生命は、大切に
す。なぜといいますに、ひとたび失われ
ますと、二度と再び生き返らないからで
あります。

それでは、イ・ノ・チをミクロのところ
で支えている、細胞はどうでしょう。

わたくしたちの体は、何百という、異な
ったタイプの細胞によってできていま
す。皮膚細胞があれば、心筋細胞があ
り、脳細胞がある、といったぐあいで
す。

それら、細胞に関していうと、その運
命は変えることができる。いや、若返ら
せることすらできるのであります。

2000年代半ば、わたくしたちは、まさ
しくこの驚異を発見しました。

ある日のことでした。皮膚から取り出
した細胞が、トット、トット、拍動を始め
ていたのです。心筋細胞に、変化して
いたからでした。

この発見に、わたくしは言葉を失いました。イ・ノ・チの驚異に面したとき、ひとは、ただ謙虚となるほかありません。

けれども、この発見がやがてアルツハイマー、ガン、心臓病など、いろいろな病気の治療へとわたくしたちを導いてくれると気づいた刹那、わたくしを身震いが襲ったのであります。

あれは、はるかな昔、私は、ああ、そうかと思ったことがあります。

科学なんだ、と。

驚異の世界、イ・ノ・チの果てない神秘の扉を、いつか開いてくれる鍵。それは、科学に違いない、と。

ひらめきが私を襲ったそれはいったい、いつのことだったか。自分に尋ねてみて、いまはつきりわかるのです。

それは、ある夏の暑い日のことです。わたくしは、70年大阪万博の会場におりました。

わたくしを困っていたのは、あふれんばかりに、科学の達成でした。

8歳の子どもにとって、なんと抗いがたい、魅力に満ちていたことでしょう

か。印象は、わたくしにおいて、長く残ることとなったのであります。

ご列席の皆さま、ひとつの誓いを結ぼうとして、わたくしここに、立っております。

いま与えられた鍵、発見によって得られた鍵をもちいまして、大阪・関西の地に深く根差した医学の伝統に支えられつつ、わたくしは、癒しがたきを癒すべく、なお一層の精進をいたします。

ご列席の皆さま、いまひとつ、誓いをなそうと、わたくしここに立っております。

その誓いとは、2025大阪・関西万博のため、それを偉大な実験室とするために、どんなことでも、やれることはなんでもやるという誓いです。

それは、イ・ノ・チの美に光を当てるラボラトリー。世界のあらゆる場所からやってくる未来の科学者たちを、魅了してやまない、驚きの実験室となるのです。

48年前のわたくしにとって、まさしくそうだったように。

ありがとうございました。